慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第59回東医体　夏季部門６連覇！

総合優勝奪還なるか

今年もこの季節がやってきた。リオオリンピックでのメダルラッシュに全国が沸いた8月、首都圏ではもう一つの熱い戦いが繰り広げられていた。そう、第59回東医体だ。この夏も我等が慶應医学部体育会の選手たちが、東日本に確固たる王者の風格を見せつけてくれた。

8月1日から14日にかけて開催された第59回東日本医科学生総合体育大会（東医体）夏季部門において、本塾は見事6連覇の栄冠を獲得した。（8月18日現在、本紙調べ）

東医体は、各競技の順位に応じたポイントが大学に付与され、その合計点で総合優勝校を争うシステムとなっている。今大会において我々は、4競技で優勝、3競技で準優勝、12競技でポイント獲得した末、夏季部門優勝に輝いた。しかし2位の信州大学医学部との差は約6・5ポイント、3位の旭川医科大学とは約9ポイントと接戦であり、非常に差し迫った状況である。夏季には2位に5ポイント差をつけて優勝を収めたものの、冬季に逆転を許し、総合優勝の連覇が途絶えてしまった去年の苦い経験を思い返すと、今年も冬季種目のアイスホッケーやスキーに一層油断は許されない。夏季の流れに乗り、より輝かしい成績を収めてほしいところである。

紙面では、男子総合優勝3連覇という快挙を成し遂げた空手部、慶應が誇る強豪水泳部をはじめ、男女ともに近年安定した好成績を収める競走部、ゴルフ部、怒涛の逆転劇で見事優勝を果たしたヨット部を取り上げた。また、今年の東医体では女子部の活躍も目立った。本号では準優勝を達成した硬式テニス女子部や女子バレー部の奮闘ぶりにもぜひ注目していただきたい。個人戦の優勝・準優勝者に対するインタビューは来月号で紹介する。

選手たちの熱く淡くほろ苦いひと夏の一ページを読者の皆様にお届けすることができたら幸いである。

（5年　中村健吾）

種目	1位	2位	3位
総合順位	慶應	信州	旭川
陸上(男子)	慶應	筑波	東北
陸上(女子)	筑波	秋田	山形
硬式野球	千葉	東医	聖マ
準硬式野球	旭川	弘前	群馬
テニス(男子)	北里	信州	東京
テニス(女子)	横市	慶應	杏林
ソフトテニス(男子)	群馬	福島県立	弘前
ソフトテニス(女子)	秋田	弘前	旭川
卓球(男子)	東北	筑波	昭和
卓球(女子)	順天	秋田	女子医
バレーボール(男子)	信州	旭川	順天
バレーボール(女子)	自治	慶應	防衛
バドミントン(男子)	旭川	東北	福島県立
バドミントン(女子)	札幌	聖マ	福島県立
サッカー	千葉	順天	新潟
バスケットボール(男子)	群馬	新潟	北海道
バスケットボール(女子)	昭和	山形	日大
柔道	東海	旭川	日大・群馬
剣道(男子)	秋田	聖マ	自治・旭川
剣道(女子)	群馬	獨協	防衛・秋田
弓道	秋田	信州	東北
空手道(男子)	慶應	獨協	自治・札幌
空手道(女子)	新潟	獨協	弘前
水泳(男子)	東北	東京	慶應
水泳(女子)	東医	順天	女子医
ヨット	慶應	東北	千葉
ボート	杏林	自治	東京
馬術	昭和	信州	東京
ハンドボール	順天	旭川	慈恵
ゴルフ(男子)	北海道	慶應	杏林
ゴルフ(女子)	慶應	杏林	北海道
ラグビー	信州	弘前	東北

競走部
男子総合優勝！来年は男女揃って！

8月6、7日に大井ふ頭中央海浜公園陸上競技場にて開催された東医体陸上競技において、慶應は男子総合で念願の総合優勝を果たした。女子は惜しくも総合5位という結果となった。

この結果は多くの部員が非常に優れた戦績を残したためである。中でも、金子健洋君（3年）が500mにおいて優勝、河田健斗君（3年）が準優勝を果たしており、一位二位を慶應で独占する形となった。宮澤剛史君（2年）は400mで準優勝を果たし、去年からの成長を見せた。島田壽君（6年）はハンマー投げにおいて優勝を果たし、また、岩本創哉君（6年）も砲丸投げ、円盤投げ準優勝と見事な活躍であった。

総合では5位入賞となった女子部でも多くの輝かしい活躍が見られた。岩部佳穂君（6年）は200mで優勝、400mで準優勝といった優れた結果を残した。また、小嶺舞（3年）が槍投で準優勝を果たした。

日々の鍛錬の成果を十分に発揮し、男子総合優勝を果たした競走部諸君に盛大な拍手を送りたい。女子の個々の活躍も素晴らしい物があった。悲願の男女総合優勝まであと一歩のところに来ている。来年度の彼らの活躍に大きな期待を寄せる。

（4年　鈴木浩司）

満面の笑みを浮かべる部員たち

ヨット部
7年ぶり、悲願の優勝！

もう準優勝はいらない。今年こそ優勝という最高の結果を信じて、精鋭たちは湘南の海に集結した。

8月5日から3日間にわたり神奈川県・江の島ヨットハーバーにて第59回東医体ヨット競技が開催された。東京五輪のヨット競技場として整備されたいわば「聖地」において、慶應は団体戦で7年ぶりの優勝、個人戦で松井友哉君（5年）・闍彌一貴君（4年）ペアが1位、矢野海斗君（5年）・横山祐磨君（3年）ペアが4位という快挙を成し遂げた。

これまで団体戦では二年連続で準優勝に留まり、あともう一歩のところで惜しくも優勝を逃してきた。度重なる悔しい思いを乗り越えて、まさにヨット部員の総力で掴みとった優勝だった。

各大学から選抜された2、3艇が3日間で計8レースを繰り広げる。海に浮かぶ目印を折り返し、いち早くゴールを目指す。合計スコアの最も小さな大学が優勝となる。

大会当日の天候は良好で、全8レースが予定通り行われた。二日目まで軽風が続き、難しい試合展開となった。軽風だと風の変化が激しく、実力差が出にくいとされる。

試合は序盤から慶應と東北の一騎打ちとなった。

第1レースの開始早々に東北の独走を許し、他艇からのプロテスト（抗議）を受けるなどの不運にも見舞われた。

第2レースの終了時に東北に大きく点差をつけられ、慶應はいきなり窮地に立たされた。

「この段階でチームとして暗くなりかけていた。でも、まだまだ逆転できるからしっかり最後のレースに集中しよう、とみんなで声をかけあった」と慶應のエース・松井君はふりかえる。逆転を誓い、皆を鼓舞した。その成果もあり、第3レースで東北を抜いて首位に立った。

2日目も慶應と東北の一進一退の攻防が続いた。東北に首位を奪われるも第5レースで逆転し、その後は首位の座を守った。どの選手も読めない風の対応に追われ激しく消耗していた。大自然との格闘も制し、首位で終えたことで慶應は東北よりも精神的に優位に立った。

3日目に強風が吹いて慶應をさらに勢いづけた。実力で東北を上回り、第7レースの終了時に慶應の優勝が確定した。

「形勢が不利になったときに皆でよく話し合い、悪い流れを断ち切れたのはよかった。自分たちの力を信じて復活できたのが大きな勝因だと思う」と松井君は語る。

準優勝に満足せず練習メニューから見直すなど、向上心が優勝という形に結実した。いまや連覇や永久杯（5連覇）も夢ではないだろう。今後の慶應の快進撃に期待はさらに膨らむ。

ただ、ヨットというスポーツにはそれ相応の費用がかかるのも事実だ。「OB、OGの先生方の支援がなければ優勝はありえなかった。応援がとても励みになった。この場を借りて心より感謝申し上げます」と松井君は先輩方に向けて述べた。

「チーム一丸となって」とはまさにこのことを言うのだろう。優勝という結果は最高の恩返しとなったのではないか。

（5年　峯岸駿多）

悲願の優勝！

ゴルフ部
女子は優勝　男子は準優勝

8月2日から5日にかけて宮城県の大崎ゴルフ倶楽部にて開催された東医体ゴルフ競技において男子は準優勝、女子は優勝という結果に終わった。

今年度から大会の運営方法が変更され男子は3日、女子は1での戦いとなった。男子は3日目の1stハーフが終わった時点で、優勝した北海道大学と同じスコアという接戦を繰り広げたがあと一歩及ばず準優勝に終わった。女子は個人入賞者がいなかったにも関わらず各選手がしっかりとスコアを出し、チームの力で優勝を掴んだ。

目標として掲げていた男女アベック優勝こそ叶わなかったものの、チームの部員それぞれが部活の格言でもある「慶應の一打」を縮めるために粘りのゴルフを見せた。この悔しさを糧に練習に精進し、来年の優勝奪還を誓う。

（4年　古川宏幸）

みんなで心をひとつに！

硬式テニス女子部
36年ぶりの準優勝！

「今年こそベスト4入りする！」。大きな目標を掲げ、慶應硬テ女子が真夏の山中湖平野東照館テニスコートに戻ってきた。二回戦で惜しくも敗北を喫した去年の東医体から丸一年、女子部代表の高野薫子君（4年）を中心に選手全員がシングルスとダブルスの両方を練習し、どのようなオーダーでも戦えるよう万全の体制を整えてきた。「もう悔し涙は流したくない」そんな思いで迎えた8月2日、ついに戦いの幕が開けた。

今年の慶應には驚異的な粘り強さがあった。「山形大学との一回戦がとにかく肝でした」と高野君は振り返る。一回戦では中村はるか君（6年）のシングルスで接戦になり、ファイナルセットまでもつれ込んだが、鍛え抜いた実力で激闘を制し、二回戦への切符を勝ち取ることができた。その後も東京医科大学、獨協医科大学を相手に見事二連勝を果たし、ようやく慶應の準決勝進出が確定した。近年なかなか越えられずにいた「ベスト4」という厚い壁を打ち破り、更なる高みへの道筋が見えた瞬間だった。

準決勝の対戦相手は秋田大学、昨年の東医体で準優勝を達成している強豪校だったが、それでも決して慶應の勢いが弱まることはなかった。武田実莉君（6年）・仲西優美子君（4年）のダブルスではボレーを得意とする2人の息の合ったプレーで着実に得点を重ね、夢にまで見た慶應の決勝進出が決まった。

8月7日に迎えた決勝戦では横浜市立大学との対戦に破れてしまったが、準優勝という輝かしい成績で慶應の底力を見せつけることができた。これまで東医体ベスト4入りを何度も逃しており、まさかメダルまで獲れるとは思っていなかったため、その分喜びが倍増したと高野君は話す。あらゆる状況を想定して鍛錬を積み続けたからこそ掴み取れたメダルだった。「ずっと部を引っ張って下さった6年生の先輩方に、最後に恩返しができて本当によかったです」歴史的勝利とともに硬テ女子の熱い夏が幕を閉じた。

最後に高野君が今後の抱負を話してくれた。

「来年度は一部リーグで王座奪還を果たし、東医体でも優勝したいです」

好成績を収めても決して現状に甘んじず、更なる進化を遂げようとしている硬テ女子部からこれからも目が離せない。

（5年　中村健吾）

掴み取った準優勝！

空手部
男子総合優勝3連覇　女子個人形で6連覇

8月13・14日に、東金アリーナにて行われた東医体空手道競技が開催された。

本大会で男子部は総合優勝3連覇かつ初の単独優勝という快挙を成し遂げた。団体形競技では関東大会で自治医科大学に敗れ惜しくも2位だったが、本大会では決勝でその自治医科大学を破り優勝した。団体組手競技では昨年度の東医体準優勝校である旭川医科大学を2回戦で破り、準決勝で団体組手優勝校である札幌医科大学にあと1歩及ばずではあったが、3位入賞という素晴らしい結果を残した。

個人形競技では杉本龍之介君（4年）が4位、個人組手競技では石田典仁君（4年）が準優勝、中山晃君（1年）が3位という団体だけではなく個人の実力の高さを示す結果となった。

また女子部では、個人形競技において岩田樹里君（6年）が他を一切寄せ付けない圧倒的な実力差で優勝を果たし、前人未到の6連覇という輝かしい偉業を打ち立てた。

総合成績では男子単独総合優勝という華々しい戦績で本年度の東医体を終えることとなった。

今回の結果は、空手部の全学年が力を合わせて試合に向けて日頃の稽古を行ってきたからこそのものである。これからも個人団体ともに素晴らしい戦績を残すことを期待して止まない。

（4年　浅田愼太郎）

団体・個人両方で好成績を残した空手部

女子バレー部
頭脳バレーで初の決勝進出

8月9日から13日にかけて、山形県の山形総合運動公園にて東医体バレーボール競技が開催され、女子部は創部以降初めて決勝戦に進出した。

女子バレーボール部は一昨年の東医体で三位を獲得したものの、優勝を目指した昨年度の大会ではベスト8で終わってしまった。その雪辱を果たすため「今年こそ優勝」を目標に向けて7月からコツコツと練習してきた。途中でエースが怪我をするなどアクシデントも発生したが、その出来事が一層チームを強くした。

東医体中は当たる可能性のあるチームはすべてメンバー全員で分担しながら偵察し、毎晩一時間程度のミーティングを行い、頭で相手チームの特性を理解することに力を入れた。このような周到な準備をしてそれぞれの試合に挑んだ結果決勝まですべてストレート勝ちで進むことができた。

決勝では自治医大に対して一セット目を奪うものの焦りが出て続く二、三セット目を落とし、悲願の初優勝には一歩及ばなかった。

東医体以降幹部が交代するが、頭で作戦を練ってプレーするこのスタイルは引き継ぎ、悔しさを糧に練習に励み、来年こそ優勝を狙う。

（3年　横溝貞由美）

初の決勝進出、準優勝

水泳部
健闘するも3連覇ならず

8月2、3日に千葉県国際総合水泳場にて東医体水泳競技が開催された。水泳部は3年前にライバルである東北大学にカップを取られるも、一昨年に優勝カップを奪還、昨年は男女とも総合優勝という歴史的快挙を成し遂げた。本年は3連覇をかけての防衛戦であった。

最終的な成績は、男子は東北大学（87点）、東京大学（74点）に敗れて3位（73点）、女子は優勝の東京医科歯科大学（67点）と14点差の5位（53点）となった。

東医体の水泳競技は男女に分かれ、出場した種目の順位が加算されるポイント制。個人個人の力が最大限に発揮されなくては勝つことは難しい究極のチーム戦である。

昨年度は5、6年生を中心とするベテランの活躍が目立ったが、本年はフレッシュな部員の活躍が目立った。

清水誠仁君（2年）は男子200m自由形で準優勝、男子100m自由形で54秒37のベストタイムで準優勝を果たした。また、北村愛花君（2年）は女子50m自由形で優勝、女子100m自由形で準優勝するなど、予科部員の活躍が目覚ましい。

本年は水泳部の本来の力が発揮されず、大変残念な結果となった。しかし、来年の東医体で雪辱を果たすべく、前主将の安藤拓君（4年）を始め、多くの部員が現役を続行する予定である。今後の水泳部の活躍に期待したい。

（4年　阿部雄志）

優勝奪還を誓う！

東医体は今年も熱かった！
各部の活躍ぶりを写真で紹介

【サッカー部】

部員一丸となって

【柔道部】

男子団体ベスト16

【バドミントン部】

女子ベスト16

【女子バスケ部】

惜しくも敗者復活戦敗退、ベスト16！

【男子バレー部】

ベスト16、試合後の達成感

【ハンドボール部】

みんなで掴み取った５位！

【卓球部】

みんなで仲良く楽しく

【軟式テニス部】

男子予選リーグ３位、女子予選リーグ４位

【弓道部】

一射に集中

【端艇部】

みんなで漕ぎきる

【馬術部】

力を合わせて

【剣道部】

みんなで強くなる！

【男子バスケ部】

慶應のチーム力！

【野球部】

大会を終えて

鑑賞知来

現在、世界各地で悲惨なテロが続発し、多くの無辜の命が失われている。家族の悲しみ、恐怖による支配など、想像すればきりがない。

なぜこのような世界になってしまったのかと考えると、そのキーワードは「疎外」だと思う。疎外された人たちは、被害者意識ゆえに、またこの世界に居場所を見いだせず、人の命の重さや共感性を見失っていく。

私は国際対人関係療法学会唯一の有色人種理事だが、対人関係療法はエビデンス・ベイストな期間限定精神療法として、認知行動療法と双璧をなす治療法である。多くのRCTから、現在最も有力な精神療法と言うこともできるだろう。

対人関係療法では対人関係上のストレスを解決しつながりを作るが、対人関係という文化特異的な要素に焦点を当てる性質ゆえ、以前から多文化圏における臨床研究に取り組んできている。

例えばウガンダのような、精神科医などほとんどおらず、向精神薬などとても賄えない開発途上国でも臨床研究で成功を収めてきている。私は衆議院議員を経験したこともあるが、まさに対人関係に焦点を当てた精神療法が地球を救う時代が到来しているように感じる。テロリズムは理事会でも話題になっている。

もう一つ、私が日本代表を務めるボランティア活動のAH（アティテューディナル・ヒーリング）も大きな希望である。

これは医学ではなく、自らの心の平和だけを目標とする各自の取り組みであるが、同じ現象を見ても、それが「自分への攻撃」なのか、「困った相手の悲鳴」なのか、見方を選択することができる、という気づきである。攻撃に反撃を返しても、いつまでたっても平和は実現しない。いったい相手は何に困っているのか、という視点を持つことが前向きで健康な変化につながっていく。

いよいよ攻撃的になってきた国内の政治を見ても、こうした視点を生かす必要があると日々感じるこの頃である。

（水島広子こころの健康クリニック　水島広子　71回）